

水成書譜
乙編
卷

農商務省
書
號
冊
共
第
四
七
五

大政官文庫
和書門
一
一
六
〇
冊
架
函
號

內閣文庫
和書類
一
一
六
〇
冊
架
函
號

內閣文庫	
番號	和 11160
冊數	7 (7)
函號	175 80



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



曲亭馬琴翁編集
著作堂一夕話 全五卷

御伽ぶらゝ 全十卷

鶴鷯貞高先生著
閑窓瑣談 全六卷
豊年先生画

天保十三年
壬寅孟春

全志發行書林

大坂 心齋橋博勞町 屋新兵衛
河内屋茂兵衛
小傳馬町三丁目
江戸 丁子屋平兵衛藏版

心齋橋通順慶町

堀 屋新兵衛

河内屋茂兵衛

小傳馬町三丁目
丁子屋平兵衛藏版

北越雪譜二編卷之四

目錄

○異獸
○弘智法印
○白鳥
○浮島
○美人
○苗場山
○鶴恩小報也

通計十三條

○火浣布
○土中の舟
○兩頭の蛇
○石打明神
○蛾眉山下標準
○三四月の雪

明治九年甲辰

此書は曲亭馬琴翁七十余年の長壽を以て五十年來に見聞せし
珍説古今未だの高海を以て集め新編の
御伽ぶらゝ人聴人実小曲亭小対してその語を聞か
諸君近き小發行をすらすらと見よ

この書は古今の奇談珍説の原本より凡小説怪談の書
多しといふは御伽ぶらゝの上小の奇談和漢の奇談
とて巻中よりとて冬さるる変るる実小怪談奇談の最
第一の物語るべしの本を作さるる本ともありぬべし

這ハ世に於る隨筆の旨趣と事より雅俗を不倫博識なり
と珍文漢文をみるは見女童家小讀易きをわびし聊も学
加自慢の事を載せ古今人の傳の面白きを集めよ
養生小の(一)教へんとをあらうて巻を用いば益ある最也

雪譜二編卷之四 下 是ノリ 廿三ヨリ 文英堂藏

小機こくわの上手ありて問屋より名をきいてちびをわつらさしめし
雪ゆきのきえのとりたる肉にくのゆふ機こくわを織おるゆふ肉にくの外ほかふ立たつを
とまば猿さるのやうあり顔かほ赤あかくちかいらの毛け長くまき人ひとより大
うらさしうらさしのまきけり此時家内の者いさ山やませふらむすり獨ひと
りまばことさうふおそ候まむらさき逃のがれんとまきど機こくわふかりふ腰こしふまは
つけたる物ありて心こころふまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
かまどのゆふふ立たつまきりふ飯い櫃びふ指さして欲ほきまきまきまきまきまきまき
事ことをうう聞きたるゆふ飯いを握にぎりてニツニツわさけまきまきまきまき
持もたりけりそのち家いへふ人ひとまき時ときをりて来きりて飯いをむゆふ
後のちふ馴なれまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
急いそのちびをわりかけふ折をりまき月つき水みづふありて御機屋ごくわや小入こいり事こと
ああずあ御機屋ごくわやの事こと初はつ手てを停とめ居ゐまき日ひ限かぎふ後のち娘むすめまきまきまきまき
双ふたご親おやも

此事このことを患うれひ歎なげきけり月つきやより三日さんじつふあつる日の夕ゆふまき家内いへうちのゆふ農のう
業わざよりかつらざるをありてあやかりゆふ久ひさかりあきまきまきまきまきまき
ゆふのゆふまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
けりまき娘むすめハ此夜このよより月つきややまきまきまきまきまきまきまきまきまき
身みをまきまき御機ごくわを織お果はるゆふ父問屋ちちとんや持も去さり往ゆきつまきまきまき
娘時むすめときああずあ俄ふ小紅ここう潮うしほふありてゆふまきまき我われが歎なげきを聞きてかゆゆ
我われを助たすけけるまきと聞きく人ひとも不思議ふしぎのまきゆふをりけりと語り
そのころ山中やまのちゆうあきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
形かたちを見せまきまき又高田たかたの藩士はんし材用ざいようありて樵夫せうぶをまきまき黒姫山くろひめやま小入こいり
小屋こやを作りまき山やま小日こひをううせり時とき猿さるふ似にて猿さるありまきまき物夜中ものよちゆう
小屋こや小入こいりて焼や火ひふああまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
赤あか髪かみ裸はだか身み通とほ身み灰はい

山中異獸の圖



山
中
異
獸
の
圖

文
海
堂
藏



秋
月
葦
牧
之
草
圖

五
音
二
編
卷
之
六

共
一
文
海
堂
藏

色あき毛の脱す小似し腰より下小枯草をまふ此物よく人の心
とふあてひくものちあよく人の馴しと高田の人のくりき按ふ和漢三
戈圖會寓類の部小飛騨美濃あひ西国の深山あも如件異獸あ事
をあるせりさまびつぎの深山あもあものあま

○火浣布

宝曆年中平賀鳩溪内源火浣布を創製し火浣布考を著し和漢の
古書を引本朝未曾有の奇工小誇り後そのち其術つらう好事
家の憾事とあまろ小我國嘗火浣布を作るの石を産まその在る所
○金城山。卷機山。苗場山。八海山その外あもありその石軟弱しく爪を
のつても犯まき木ぶの軟ある石ありいろ青く黒しこまをくらげけバ
石綿を出ま此石を得て試し小石中あ在る石綿といふもの木綿とを
細く袖するを三分やふちぎうさうあるものあり是を紡績する小秘術

あり火浣布を造るあり其秘術を得バ小女子も火浣布を織るべし
○さて我驛中小縮荷屋喜右門といふもの石綿を紡績する事小予思
万慮を費し竟ふ自その術を得る火浣布を織るをり又其頃我近
村大澤村の医師黒田玄鶴も同く火浣布を織る術を得たり各々
秘しその術を入ふ傳へざるふらうト時あむト村つぎあむらト火浣
布の奇工を得るも一奇事あり是文政四五年の間の事ありき此兩
人の説をまきし小力をつく其一文以上あるを織らうトあむも其機工容易
あむとより平賀源内六織を五六尺過むと火浣布考のりまも玄鶴が源
内小まらう事ハ玄鶴ハ火浣布の外小火浣紙火浣墨の二種を造
まり火浣墨を以て火浣紙小物をまき烈火ふけく火とありしをま
くふとらひて火氣さしむ紙も字もまらうとらひてまらうも其實用
をらひ火浣布も火浣紙も火災の供あ憑 ぐらういんともまら火

遇ハ俱とも火ひとあり人あり火中よりいさぎよいさぎよ火ひと俱とも碎くだけし形かたちをじ
 ろふたろふた灰あしとありさるのさありかえん觀かん具ぐふ用もちうる所ところさありあつて源内
 死しし奇術絶まへたりし小件せうけんの西人せいじんの火浣布かゑんぷの機術再世きじゆざいせいのい
 嗚呼あゝ可惜きやく此こ西人せいじんの術じゆつをつとむとてかぢ没なしま火浣布かゑんぷありか世よ絶た
 たりかの源内げんないの江戸えどの饒地じょうちの火浣布かゑんぷを織おりか其その聞きこえ高たかくま
 西人せいじんの越後えちごの辟境へききやうの火浣布かゑんぷをかりか其その名な低ひくまゆふらふさる
 一々いっさ好事家こうじかの一話いっさ小供せうこうす

○弘智法印

弘智法印ハ児玉氏下総国山素村の人あり高野山ありて密教を
 学まなびか後生国ごせいこくの飯いり大浦おほうらの蓮花寺れんげじに住すり行脚ぎやうきゃくして越後えちご來きり三
 嶋郡のづみぐん野積村のづみむらの海雲山西生寺かいうんざいせいじの東ひがし岩坂いわさかといふ所ところに錫しやくをかめめ草
 庵あまをかししむむびびし貞治二年癸卯十月二日此庵こゝに寂じやくせり辞世じせとて

口碑こうひふつとつる哥かハ山岩坂やまいわさかの主ぬしを誰たれぞと人間にんげんを墨繪すみえし書かき松風の音しょうかぜのね
 遺言いごんありとて死骸しがいを不埋ふまい今天保九けんたぽくをさる事こと四百七十七年しよほくしちじふしちふり
 り枯骸こがい生なるが如ごとく是こゝを越後えちご丹に四し寺じのいふ數かずふ此こゝ事こと雜書ざうしより
 散見さんけんをさるも圖ずをのせつものなりゆふ圖ずをさるふりて此こゝ圖ず
 ハ余あま先年せんねん下越後げちごふあをかびび時目撃ときめげきしたる所ところあり見みる所ところに面
 部ぶのい手足てあしハ見みええむ寺法じほふありとて近ちかく觀みる事ことをゆきき聞き眼まなこ
 皺しわありとて眠ねりかるが如ごとく頭巾法衣づきんほふえハむじのまふありあつてさるるが
 是こゝ他国たこくハ聞ききる越後えちごの一奇跡いっしきせきあり

百樹ひやくじゆ曰い唐土たうどハ弘智こうちハ似にたる事ことあり唐の世たうのよの僧義存そうぎぞん没なつて
 のち尸しかばねを函中つとに置おき毎月まいげつ其徒そのととをいづりつハ髮かみの長ながさをか剪き
 薙そつつ常とことて百餘年ひやくじよねんを經へるも廢やせざりしが後国のちこくのいづれれるるハ
 因よりここを火葬くわさうせりととて又宋人そうじん彭乘へいじやうハ作墨客さくがく揮犀きせハ

別州の僧无夢も尸を不埋凡髮の長す義存小同トかり

文漢堂藏



○土中の舟

蒲原郡五泉の在一里をり小下新田との小村あり或年此村の若とも夏
ありて阿加川の岸を掘り小土中より長さ三間をり舟を掘り

婦人の子小摸らじ
より凡髮のびざりし
とて事ハ五雜組小
記て枯骸の確論わ
且ども親氏を詰ふ
似て説るるばら小
贅せむ。高僧傳小義
存が度あり
くと覺らさのそんそ
詳究せむ

全体少くも腐れ形今の船小異るのそあつて金具を用うべき処を
鯨の鬚を用ひ寸鉄をもわじりてさるる木もま何の木あるを
弁ぐる者ありてそくハ異国の船あるとつてとぞ余下越後小遊び
一時杉田村小野佐五空門が家少かの船の木も作りたる硯箱を見
し小木質漢産ともおもひて古漂流の夷船やあらん

○白鳥

前よりも如く雪譜と題するもの小他事をりて小哥小の落題あれ
ど雪はまゝ末小のて一姑くおひひのて小まをる○天保三年辰四月
我が住塩澤の中町小鍵屋某が家のやう小喬木あり此樹小鳥巢を
むきハ雛稍く頭をいそとる巢のうち小白き頭の鳥を見主人怪し
人をしそ是を捕りて小全身ハ鳥小く白く嘴眼足ハ赤き鳥の雛
あり人々奇とて集り觀る主人俄小籠を作せ心を盡く養ひ

雪譜二編卷之下

廿九 文漢堂藏

や長ども鳴音も鳥小異あつて我が近隣あるは朝夕を觀す
 奇鳥あまふ人も多く江戸へ出しく觀物小せんあつてひも有し
 主人をいへぬさびかく其冬雪中ふりう山の鼯狐を餌小多く
 人家ふきうり食をねむ事雪中の常あま此の所為ふや籠
 いかまて白鳥ハ羽をり縁の下小ありとき初編ふ白熊の事を載
 たるゆゑ白鳥もまことふ記しぬ

○兩頭の蛇

文政十年庚の八月廿日隣驛六日町の在余川村の農人太左門の軒端
 小兩頭の蛇いへるを捕ふ長さ一尺ふたど七の頭ニツ並びて枝をふ
 のりろもかとも常の蛇ふりてあふまうせと古き箱ふは餌も
 しこまき一ハ二三日をさうり逃ゆき一やあつてをたぐひりごとを
 ざりーとぞ

○浮嶋

小千谷より西一里小芳谷村といふありと小郡殿の池とて四方三町斗
 の池ありて浮嶋十三あり晴天風あき時日出まば十三の小嶋あつて
 離散し池中小遊ぶ如く日入まば池の正中小あつて一ツの嶋とあつ
 此池小種くの奇異あまども文多けとあまび羽州の浮嶋ハものあり記
 しく人の知る処あまども比うさき海はあま人もあつ

○石打明神

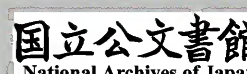
小千谷の内農人某の地面小社あり石打明神といふ昔より祀る処也
 その縁起ハ聞ゆるせり贅肉あまもの此神をいり小石をりつていを
 撫社の縁の下竹子の内一投りまてく小日あまどもいりやのあつ事
 奇妙ありさくあげりて小石のうら形ありともいりてあま人の圓め
 するごとく圓石とあつても又奇妙ありさくあつて社のおんの下小大小の

圓石満ちらりり ○百樹曰余も小千谷小遊び一時此石を視て話柄小
 一ツ持帰んとせし小所の人のゆかり此神是石を惜み玉をとりひつゝふと
 ききて取らるをゆゑの処へつゝ視る小数万の石人の磨き
 する玉のごとく凡神妙ハ肉知を以て測るべし

○美人

百樹曰小千谷の因ふ余小千谷の岩居が家小旅宿せし時天保七
 或日筆を採る倦山水の秋景を觀るやとて獨歩のこ小千谷の前
 小流より川小臨岡のり用意する書をく毛氈を老樹の下小
 志き烟らめせつ眺望ハ引舟ハ浪小廻りくうごさるか如く下る
 舟ハ流小順らる飛小似たり行雁字をみる歸樵画をひく
 群木ハ少く霜を添く紅く連山ハ僅小雪を載ふ白く寒
 国の秋景江戸の眼を新ふりしむらび一絶を得あどて云

むらびめめをりしむらびも十六七の娘三人あてし柴籠をせむ山
 をのりてらふかをひる小やんものひるくえらめをきく余ハ
 山水小目を奪はるとる小火をかきまきとて烟管さしよせし顔を
 見まば蓬髪素面あて天質の艶色花ともゆげ玉も比まば
 百結の鶉衣此趙璧を羅む余愕然し山水を棄て此娘を視る小
 一揖し去り樹の下草小坐してあしをあげてきせるの火を
 うつゝむをめ三人ひと吹烟双無塩獨の西施と語る兼葭
 玉樹小よるが如く皓齒燦爛とてくらふ白芙蓉の水をいづ
 微風小揺かごとく嗟乎惜べしかき美人も是邊鄙小生と昏
 庸頑夫の妻とあり巧妻常小拙夫小伴とて眠り荆棘と俣小
 齋らん事憐不堪たり若江戸小いづま朱門小解語の花を開
 あるひハ又清樓小揺泉樹の栄をり此隣國出羽小生とて



小野の小町が如く美人の名をもあまぎふ此美人を此僻地不出
 ず天公事を解さるふ似たりと獨歎息しつ言んとあふ娘ハ
 去來とくあふび柴籠をせおひうちつとく立きりけり目送る
 願越後ゆ美人多しと人の口實ふりもうべあり是無他なり水
 小よるゆありのささぐ織物の清白なる越後の白縮ふ勝まてふ
 ありことささぐ此邊ハ白縮を産する所あり以て其水の至清なる
 をあるべし江河潔清あるば女小佳麗多しと謝肇淛がひひも
 理ありとあひひつ旅宿不歸り云々の事あり美人を視たりと岩
 居ふ語りけは岩居いりやう渠ハ人の知る美女あり先生を他國の
 人と眼解欺きたをこの火を借するん可憎く「吾はむむづらふ
 吾たをこの火を借て美人ふえん縁をむむび」と戯言けは岩居
 手を拍り大に笑ひ先生誤りうとあ屠者の娘ありと聞くと再び

然らる糞壤妖花を出るとかから事あせらひうらるべし
 ○再按小野の小町ハ羽州の郡司小笠の良實の女あり楊貴妃ハ
 蜀州の司戸元玉の女あり和漢俱ハ北國の田舎娘世ハ美人の名を
 つふ北方小佳人ありといひも北ハ陰位あるば女小美麗を出せ
 めやあらん二代目の高尾ハ羽野州小生と初代の薄雲ハ信州小産
 とり小北廓小名をあせりささぐ越後小件の美人を見ても北國
 あまぎふるべし

○蛾眉山下橋柱

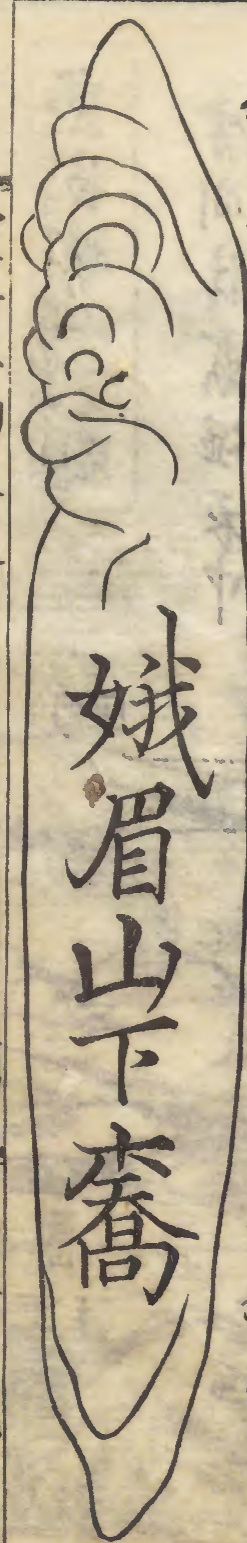
文政八年乙酉十二月朔羽郡越後推谷の漁人推谷ハ堀侯のあつ日推谷の
 海上小漁して一木の流し漂ふを見て新小せをやと拾ひ取て家小
 りの水を乾さんとて底小豆寄をきうを推谷の好事家通りかり是を
 見るとあぬ木とあひ熱視小蛾眉山下橋といひ五大字刻あり

しをものつゝかの国の物とすひ漁人ぬ新を与へてひうけまるとを
 さて余が旧友觀劭上人推谷の田沢村 浄土宗 祐光寺強学の聞えあり嘗て好事の癖
 あるを以てかの橋柱の文字を双鈎刊刻して同好の者あり且橋柱の題
 する吟詠をといは是も又梓のし世に布んとせよとて故ありといひま
 不果うの橋柱の後小御領主の御藏とありとて推谷に余が同国ある
 とも幾里を隔てて其真物を不見今小遺憾とて姑傳寫の圖を
 以てて不載つ。百樹曰牧之翁が此章稿のせしる面を見よ少くもわの所直
 百樹曰了阿上人が和哥の友相場氏の推谷侯の殿人とて上人
 の召をものつゝ相場氏小對面して件の橋柱の事を尋ひし
 余不謂し橋柱のありし標準ありとて俗に書翰帛といふ物
 小作りしるを出しし其圖を示さる余が友の画人千春子が真
 物を傍らに縮圖あり娥眉山下齋といふ五字ハ相場氏

こつゝ心を深めたるつゝとて下小圖を彫る人の頭を
 左り不願せその下五字を彫つけは是より左り娥眉山下
 橋ありと人小をりゆ標準ありとてつゝ是れは美理
 渙然より今俗に指を名づるそのあふをりゆ所を記
 するを間する事あり和漢の俗情あり事あり。さて此標
 準を得る實事をきくし北海のいづこの所も冬ふしとて常
 北風烈し碓へ物をうちよる推谷はたきものふとがしき所
 の冬貧民拾ひ取りし薪とるを事常ありあるふ文政八酒の
 十二月例の如く薪を拾ひ出し物ありし柱のごとく浪小漂ふ
 をとる人の頭とる物あり甚兇惡あり貧民等懼むるを
 かりののつげより見居るふ此の意不碓ふらあげしを
 見る人々よりなるふ文字ハあまも讀者あり是ハ何もの

こつゝ心を深めたるつゝとて下小圖を彫る人の頭を
 左り不願せその下五字を彫つけは是より左り娥眉山下
 橋ありと人小をりゆ標準ありとてつゝ是れは美理
 渙然より今俗に指を名づるそのあふをりゆ所を記
 するを間する事あり和漢の俗情あり事あり。さて此標
 準を得る實事をきくし北海のいづこの所も冬ふしとて常
 北風烈し碓へ物をうちよる推谷はたきものふとがしき所
 の冬貧民拾ひ取りし薪とるを事常ありあるふ文政八酒の
 十二月例の如く薪を拾ひ出し物ありし柱のごとく浪小漂ふ
 をとる人の頭とる物あり甚兇惡あり貧民等懼むるを
 かりののつげより見居るふ此の意不碓ふらあげしを
 見る人々よりなるふ文字ハあまも讀者あり是ハ何もの

ゐんとさぬぐ評し居るをりしもろふ近き西禅院の童僧
 通りかり唐詩選あつてわびえたる蛾眉山の文字を讀こし唐土の
 物ありとききて貧民拾ひて持りのさまを唐土の物とききて薪ゆも
 せざりし小此事関傳しき竟小主君の藏とありしと語るとき
 ○按る小蛾眉山ハ唐土の北小在る峻岳也富士もくふべき高山
 あり絶頂の峯双立し八字をあらせぬ蛾眉山といふあり此山の
 標準日本の北海（あがき）よりたる其水路を詳究せんとい唐土
 歷代州郡沿革地圖（あがき）小扱て清国の道程圖中を檢する小蛾眉山
 ハ清朝の都を距こと日本道（あがき）四百里許の北小在り此山小遠くして
 一（あがき）條の大河東小流蛾眉山の麓の河く皆此大河小入る此大河
 瀘州を流し三峡のあつてを過ぎ江漢小至り荆州小入り。洞庭湖
 。赤壁。潯陽江。揚子江の四大江小通し江南を流酒りて東海
 小入る是水路日本道五百里をりありさて件の標準洪水ゆてや
 水小入りけん。洞庭。赤壁。潯陽。揚子の海の如き四大江を蕩漾周
 流し朽沈む溜くし水路五百餘里を流し東海小入り巨濤小
 千倒し風波小万顛をせども新折碎粉せを直身挺然とて我
 国の洋中（あがき）小漂（あがき）北海の地方小近より推谷の貧民小拾とて始
 水を辞し既小一爐の薪とありべきを幸ふ字を識者小遇ひて死灰を
 のがと韻客の為小題咏の美言をうけしものありは竟みハ
 推谷侯の愛を奉し身（あがき）を宝庫小安ん（あがき）ト（あがき）万古不朽の洪福を
 保つ（あがき）隻奇妙不思議の天幸ありし實小稀世の珍物あり
 縮圖左のひと
 起一文餘 周二尺五寸餘 木質弁名（？）



蛾眉山下喬

登苗場山之図

霄間清露湿衣中
寒際平蕪四望秋
呼吸極か通帝座
徘徊却愧問天人
吐息毛雲と也

かろく森 常の秋
秋序尾牧之

下廿

里五

川曲千州信

秋

秋山



畫譜二編卷之下

三十五

文溪堂藏

按つざる小蛾ガ同韻五何反の六相通ト往リ書見ト橋ヲ喬ノ小
 作ル頗ニ異ニ体アリ依ル明人黄元立が字考正誤清人顧炎武が
 亭林遺書中小在る金石文字記ありハ碑文摘奇藤花亭十種
 ありハ揚霖竹菴が古今釈疑中の字體の部と通卷一遍搜
 索スる事も喬の字ヲ蛾眉山のある蜀の地ハ都ヲ去ル事
 遠キ僻境あり推量スる小田舎の標準ありハ学者の書ハあり
 ありハ俗子の筆ヲる事も我今の俗竹を竹とイハ誤
 の類ヲ猶博識の説ヲ俟ツ

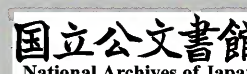
○苗場山

苗場山ハ越後第一の高山あり魚沼郡登リ二里とハ絶頂ハ天然の苗
 田あり依ル昔ヨリ山の名ハ呼ボあり峻岳の巔ハ苗田あり事甚奇あり
 余其奇跡ヲを尋ンとハ事年あり小文化ハ年七月偶ハひたり

友人四人・嘯齋・嶺齋・從僕等ハ食類其外用意の物をりハ同月五日
 未明ハなりハ其日ハ三ハ僕とハ驛ハ宿り次日曉を侵ハ此山の神職ハ
 いハハ一旅ヲを案内者を備ハ案内ハ白衣ハ幣ヲ捧ゲ先ハ
 毛ハ清津川ヲ渉リ中ハ禁ハハ一峽道ヲ踏ハ嶮路ハ登リ小柳樹
 森列ハ日ヲを遮リ山篠生ハ浅リ徑ヲを塞グ枯ラ老樹折リ路ヲ
 横リを踏ハ一條の溪河ヲ渉リ猶登事半里
 許右折ミ左ハ曲リ奇木怪石千態万杖筆ヲ以
 てハ已ハ途ハ鳥の声ヲも死東西を弁ト道
 道ハ案内者ハ知リハ山篠ヲをハ幣ヲ
 さハけハ示ス藤蔓笠ハハ一杖竹身ヲを隠シ石高くハ
 徑狭く一歩ハ平阻のをハ午ハ頃山の半ハあり
 僅ハの平地ヲ得ル用意ハ即座ヲ木蔭ハ食ヲを暫く

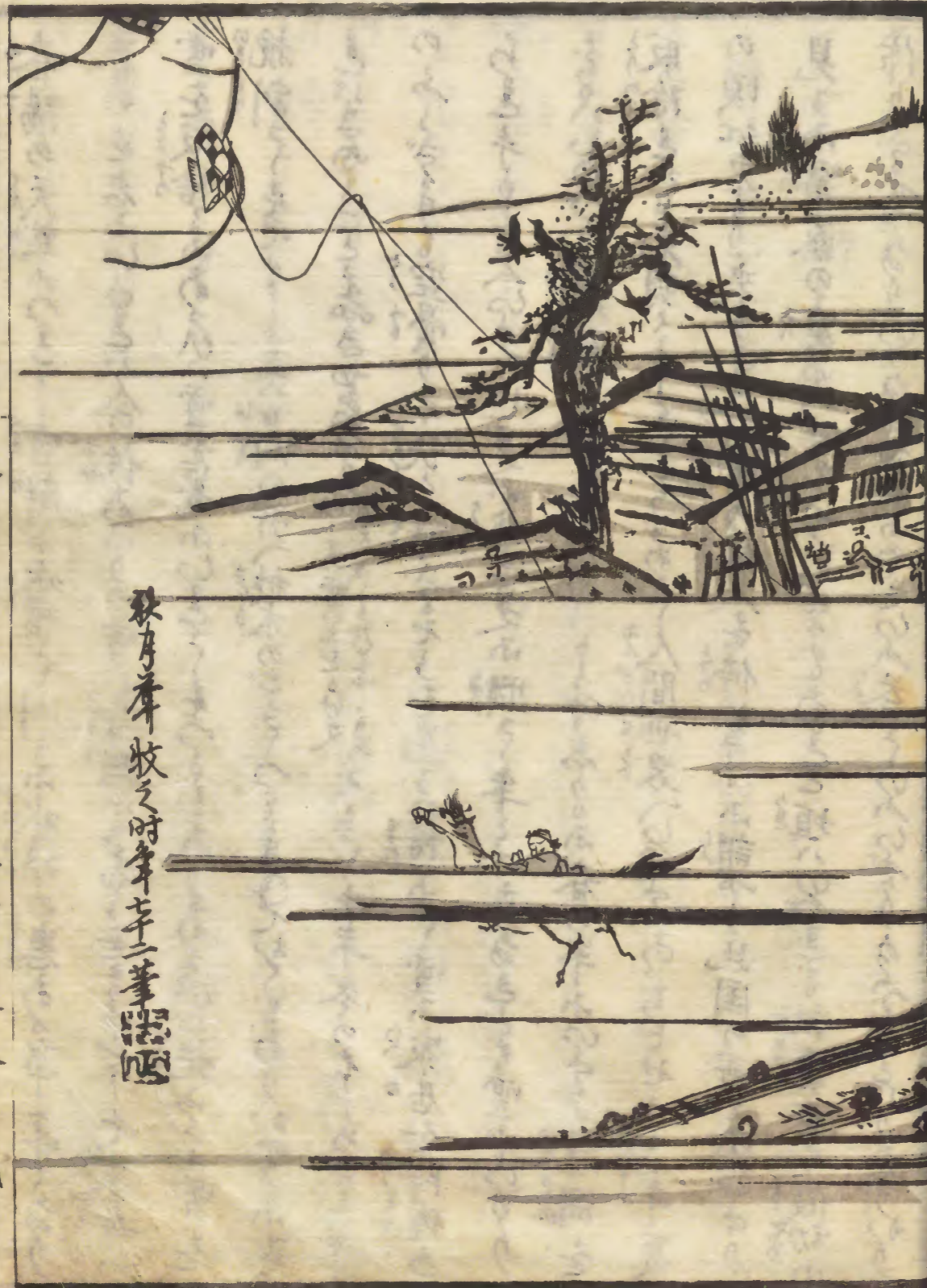
越てまこのやうく神楽岡といふ所ふらまじりことより他木さうふ
 ろく俗小唐松といふ所の風ふたけをのぞきまじり楢ハ雪霜や枯されん
 低き森をうけてさかしくありまこのやうく御花園といふ
 所山極盛ひき百合桔梗石竹の花をそのさぬ人の植やまひし似たり
 名をあらうまじり異草ありまこのやうく薬草ありといふりまこ
 のやうくまじり機懸る道ふあやう岩ふといふ竹の根を力草とい
 一歩小一音を発しつゝ氣を張り汗をまじり千辛万苦のやうにして
 馬の背といふ所ふらまじり左右ハ千丈の谷ありまこの所僅ふ二三尺一脚をあや
 まの時ハ身を粉碎ふるまじり忙怖あやうて竟小絶頂ふといふまじり
 〇諸同行十二人まじり草ふ坐して越ふ時已ふ下哺ありまじり案内者の
 いひハ登り二里の險道ありまじり一日小往來まじりことあらまじり絶頂小小屋在
 るふのやう人必その小屋ふ一宿する事ありといひり今その小屋をまじりま

木の枝山き枯草あど取りあつらふらまじり匍匐入るまじり小作りた
 るハ野非人のまじりまじりまじり今夜のやうふまじりまじりまじりまじり
 まじり笑ふ僕まじり枯枝をひらひ石をあつらふらまじり假小灶をまじりまじり
 食物を調せんまじりあつらひ水をたづねて茶を煮まじり上戸ハ酒の烟をいそぐ
 をまじり肥後越後まじり浅間の烟をまじり信濃の連山まじり眼下小波濤まじり千隈
 川ハ白き糸をひきまじり佐渡ハ青き盆石をまじり能登の洲崎ハ蛾眉をまじり越前
 の遠山ハ青黛をのまじりまじり小眼を拭く杖葉第一の富士を視いまじりまじり
 まじり雪の一握りを置かまじり人々手を拍奇ありと呼びまじりまじり稱讚を千
 勝万景應接まじり小追あまじり雲脚下小起まじりまじりまじり忽晴まじり日光眼を
 射了身ハ天外小在まじり如く是絶頂ハ周一里といふまじりまじり平光高抵の所
 を不見山の名ふまじり苗場といふ所まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
 まじり田の如き中小人の植まじりまじり苗似まじり草生まじり苗代を半まじり



のり〜つるやうなる所を奇ありと云ふ此田の中小蛙夏冬虫も
ありて常の田かた事又々多る且つやも田水枯きと二里の巔此奇跡を観ること
甚不思議の天山あり案内者ゆり御花園より別小徑ありて竜
岩窟とらふ所あり窟の内小一條の清水あがるとのやう小古錢多く野口ニツ
掛りありて神を祀るむより如斯とらひつゝとらひ今草木小塞ま
てまよあがり〜とらひ絶頂あり石刻して苗場大権現とあり案内者ハ此石
人作あま天然の物と云り俗傳あや〜と見ぬがち日まま小屋内りハ
挑燈をさげ〜とらひに外ハ火を焼く〜び食を〜の〜ひて酒を
酌六日の月皎〜とて〜空もちら〜桂の枝も〜とらひ〜
人〜詩を賦〜哥をよ〜俳句の吟興あり〜や時をう〜た〜寒
気次第小烈〜用意の綿入も〜の〜て終夜焼火ふありて夢も
む〜とらひ〜御來迎を拜

たま〜と案内がらふ小ま〜を拜所ハ〜日の昇を拜〜とらひ〜て山
を〜とらひ別小徑あり〜
○百樹曰余越遊〜時牧之老人ハ此山の地勢
を委〜真景の圖をも視〜小巔の平坦あり苗場の奇異竜岩
窟の古跡あり水ゆも自在の山あり〜ハ上古人あり〜此山をひ〜
絶頂を平坦あり〜馬の背の天険をた〜小住居〜耕作を〜
〜とらひ〜其天魂〜とらひ〜苗場の奇異を〜とらひ〜思〜
国史を捜究〜其徴を〜端をも得〜や博達の説を聞ん
○三四月の雪
我国冬六〜あり春ふあり〜二月頃までハ雨降〜事あり〜雪のありあり
ある〜春の半ハ〜小雨あり日あり此時ハ〜晴天ハ〜とらひ雨
ふ〜風あり去来〜積雪あり〜小消〜あり〜とらひ〜家居あり〜乾〜
北東あり〜事あり〜山の雪ハ里地より〜とらひ〜



秋月年牧之時年辛三筆墨画



市中四月雪解圖

春陽の天然ふつと雪解水増く川々水難の患ある事年々あり
春の生あふし里々人の住あつる雪自然ふまゝをまきどて家毎小
雪を取捨ふあひハ雪を蓄ふしとてまつるもあつるハ鋸め雪を
挽割くまきも一又日向の所ハ杖木のてつとてまきもあつるかやう小を
まきまゝあつてこそ雪のあつり灰をうくたすやまゝとて去年冬のもどりより雪
のふつる日も空曇りて快く晴るそつを見ふ稀ゆ雪小家居を降埋め
らる手もさへいふは是ハ生と是ハ慣く年々の夏も雪小あつり
をるハあつる朦然とて心だのうづあつる春の半ふり雪圃を
取除き日光明くとてとてとて人間世界ハとてあちぢせとて一年夏
の頃江戸より来りたる行脚の俳人を傳き一ハ謂や此国の所ふり
見ふ小富家の度ハ手をつじるともあまど垣ハびま粗畧め假初ハ
作りたるやあつりつとてあまどとて答とてつとてあつりあつり

その小作りあつる雪のあつりつとてあまどとてつとてあつりあつり
とて雪ふち崩れあつりつとてあまどとてつとてあつりあつり
と語り一事のあつる雪のあつりつとてあまどとてつとてあつりあつり
とて又雪中ハ馬足もたて耕作もせむ馬ハ空ハ厩ハあつる事凡
百日あつり一我國ハ半の雪のあつりつとてあまどとてつとてあつりあつり
嘶ま路ふじんとてあつりつとてあまどとてつとてあつりあつり
ひつとてあつりつとてあまどとてつとてあつりあつり
所小をり此馬冬ごりの飼ふより瘦と肥とあつりつとてあまどとてつとてあつりあつり
主の負たあつりつとてあまどとてつとてあつりあつり
はる事あつりつとてあまどとてつとてあつりあつり
草履せつとてあつりつとてあまどとてつとてあつりあつり
櫻も此とてあつりつとてあまどとてつとてあつりあつり



観小供先
 けが軍器
 の時代ハ
 棄て訂む



阪額野陣之圖

長の太郎
 諷小遣ハ
 鎌倉より
 討手未止ハ
 阪額女大将
 とて遠く
 小軍小勝て
 野陣を張る
 事ハ本文ハ
 あり文ハ和
 けとハ合者つ
 小一圖を
 の
 見曹の

文
 洋
 室
 補

○鶴恩小報也

天保七年丙申の春我が郡中小千谷の縮商人芳澤屋東五郎俳号を
二松といふもの商ひの爲西國小いり或城下小逗苗の間旅館の主なるを
一此近在の農人のまが田地のうら小病鶴ありて死ふいせんとするを
見つけ貯る人考ふく鶴の病を養一小日あつて病癒て飛去りけり
さて翌年の十月鶴二羽かの農人が家の庭らう舞ふなり稲二莖を落
一一声が鳴て飛去りけり主人拾ひとりて見るとその丈六尺小あまり穂
も是小つと長く穂の一枝小稻四百粒のり主人おつて去る去年の
病鶴恩小報んと異國より怪えきなり一多ん何れもわさひとあつ
ら一き稻ありとて領主小奉りけり小まをうくとあつて一のちその
ま一主小なまりりや中一あつておせふよりと苗のころ小いり心をつて
植つけり小鶴がわすれらるるよと生ひてけり國の守りも奉り

一とうとより東五郎猶との村その人を尋まけり鶴を助けたる人
東五郎が縮を賣る家ありてあつてあつて家小いり猶委り聞て去る國の土
産小せん穀を二粒賜ふと一とけりあつて越後ハ米のよき國とてけり
とさう小生いんとの五六十粒ありてを國一持りて事の来由をヤて
邦君小奉りを 御城内小植り玉の東五郎一 御褒賞あると在りと
小千谷の人その頃物かまはりあつて小余かごととて賤農もかゝるめとさ
御代小生とてさつこを安居一七か筆も採あつてさつこ千年の昌平を
いのり鶴の話小筆をとらりつ猶雪の奇談他事の珍説小漏り
するも最多けり生産の暇あつて編を嗣

北越雪譜二編四卷大尾

通巻画圖 京水 岩瀬百鶴筆



京山人百樹翁著述目錄

○和漢印章考 五卷

本朝古印の模本を圖一制、渡田格を弁を考證、漢印小辨を以て和漢と目せしむる、朱象賢が印典の作格小傲ふ

○食物沿革考 五卷

昔の食物と今の食物の沿革を弁し、食器の古圖をまじりて諸書を引て考をまゐる

○和漢押字考 三卷

俗小書判といふもの起原をまゐり、かきまんの作りやうを論弁せり

○骨董集 三編 卷二 四編 卷二 醒齋京傳先生遺稿 京山人翁増修

○女粧考 前後 六卷

○芭蕉年譜 三卷 一巻成一代の始終をまゐる

○高尾考 同 万治の高尾白刃不死の事説を論弁し、高尾十一代の傳遺墨遺器をうくる

○茶の湯初心抄 同 茶の湯を學ぶ人此書をまれば、その大槩をまゐり、茶席のつらりたる心を得をまゐる

